

令和四年度 入学者選抜学力検査問題

国語

注意事項

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子及び解答用紙の中を見てはいけません。
- 二 解答用紙は三枚あります。
- 三 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の枚数の過不足や汚れ等気がついた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 四 試験開始後、すべての解答用紙に受験番号、志望学部及び氏名を記入してください。受験番号の記入欄は各解答用紙に二箇所あります。
- 五 解答はすべて解答用紙の指定された解答欄に記入してください。
- 六 問題冊子の余白は適宜使用してください。
- 七 各問題の配点は二百点満点としたときのものです。
- 八 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(配点80)

著作権保護の観点から  
問題文は掲載していません。

著作権保護の観点から  
問題文は掲載していません。

著作権保護の観点から  
問題文は掲載していません。

著作権保護の  
観点から問題文は  
掲載していません。

(管啓次郎『本は読めないものだから心配するな「新装版」より)

(注)

- 1 ラブレール——フランス・ルネサンスの代表的物語作家、人文主義者、医師。
- 2 フィネガンズ・ウエイク——アイルランドの作家ジェイムズ・ジョイスの作品。
- 3 ヴアルター・ベンヤミン——ドイツの思想家、批評家。
- 4 レヴィーストローヌ——フランスの人類学者。
- 5 レミング——ネズミ科の哺乳類。たびねずみ。
- 6 構造主義・記号論——一九六〇年代、フランスを中心に現れた諸科学における新しい考え方。

問一 傍線部①～⑥について、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 

A
---

 に入るものとして最も適切な表現を次の1～5から一つ選びなさい。

- 1 どこにあるのだろうか
- 2 そんなに簡単なものではない
- 3 まさに古人の教えのとおりである
- 4 これにつきるんじゃないだろうか
- 5 こんなふうに言ってしまうてよいのだろうか

問三 筆者は傍線部ア「読書の実用論」をどのように説明しているか。五十字程度で答えなさい。

問四 傍線部イ「われわれの記憶力ほどあてにならないものもない」とはどういうことか。次の文の 

--

 に入れるのに適した表現を本文から三十字で抜き出しなさい。

一度読んだことがある本であっても、そのことを忘れてしまい、

--

 ということ。

問五 傍線部ウ「理想の境地」についての筆者の考えを七十字程度で説明しなさい。

問六 傍線部エ「本は物質的に完結したふりをしているが、だまされるな」とあるが、これはどういうことか。六十字程度で説明しなさい。

二 一の文章は、『源氏物語』えいわせ絵合巻の一節である。これは、宮中でひかる光源氏方と権中納言方による絵合せが行われた後、光源氏が弟のそらのみや帥宮と芸事の習得について語り合い、両者の父きりつぼ桐壺院の在生中の事を懐かしむという場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(配点70)

夜明け方近くなるほどに、ものいとあはれに思われて、御土器かはらけなどまるるついでに、昔の御物語とも出いで来て、①光源氏「いはけなきほどより、(注2)学問に心を入れてはべりしに、すこしも才ざいなどつきぬべくや御覧みじけむ、院ののたまはせしやう、才学(注3)といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、命、幸ひと並びぬるはいと難きものになん。品高く生まれ、さらでも人に劣るまじきほどにて、あながちにこの道②な深く習ひそとい謙めさせたまひて、(注4)本才のかたがたのもの教へさせたまひしに、拙ちきこともなく、またとりたててこのことと心得ることもはべらざりき。絵描くことのみなむ、あやしくはかなきものから、いかにしてかは心ゆくばかり描きてみるべきと思ふをりをりはべりしを、(注5)おほえぬ山がつになりて、四方よちの海の深き心を見しに、さらに思ひあよらぬくま隈なくいたられにしかど、筆のゆく限りありて、心よりは事ゆかずなむ思つたまへられしを、ついでなくて御覧みぜさすべきならねば、かうすぎずきしきやうなる、後の聞こえやあらむ」と、(注6)親王に申したまへば、(注7)帥宮「何の才も、心より放ちて習ふべきわざならねど、道々に物の師あり、まねびどころあらむは、事の深さ浅さは知らねど、おのづからうつさむに跡ありぬべし。筆とる道と碁打つこととぞ、あやしう魂のほど見ゆるを、深き(注7)き(注8)労働なく見ゆるおれ者も、さるべきにて描き打つたぐひも出で来れど、家の子の中には、なほ人に抜けぬる人の、何ごとをも好み得けるとぞ見えたる。院の御前にて、親王たち、内親王、いづれかはさまざまとどりの才ならばさせたまはざりけむ。その中にも、とりたてたる御心に入れて伝へうけとらせたまへるかひありて、(注9)文才をばさるものにていはず、さらぬことの中には、琴弾かせたまふことなん一の才にて、次には横笛、琵琶びは、箏さうの琴をなむ次々に習ひたまへると、上も思ひのたまはせき。世の人しか思ひきこえさせたるを、絵はなほ筆のついでにすさびさせたまふあだ事とこそ思ひたまへしか、いとかうまさなきまで、いにしへの墨書(注10)きの上じやうす手ども跡をくらうなしつべかめるは、かへりてけしからぬわざなり」と、うち乱れて聞こえたまひて、(注11)酔よひ泣なきにや、院の御事聞こえ出でて、④みなうちしほたれたまひぬ。

二十日あまりの月さし出でて、こなたはまださやかならねど、おほかたの空をかしきほどなるに、(注11)書ふんのつかき司の御琴召し出でて、和琴わごん、権中納言賜りたまふ。

さはいへど、人にまさりて掻きたてたまへり。親王、箏の御琴、大臣、琴、琵琶は少将命婦仕うまつる。(注12)上人の中にすぐれたるを召して、拍子たまはず。(注14)いみじうおもしろし。明けはつるままに、花の色も人の御容貌もほのかに見えて、鳥のさへづるほど、心地ゆき、めでたき朝ぼらけなり。禄どもは、中宮の御方より賜す。親王は御衣また重ねて賜りたまふ。(注15)

そのころのことには、この絵のさだめをしたまふ。光源氏「かの浦々の巻は中宮にさぶらはせたまへ」と聞こえさせたまひければ、これがはじめ、また残りの巻々ゆかしがらせたまへど、光源氏「いまつぎつぎに」と聞こえさせたまふ。(注16)上にも御心ゆかせたまひて思しめしたるを、うれしく見たてまつりたまふ。はかなきことにつけても、かうもてなしきこえたまへば、権中納言は、なほおぼえおさるべきにやと心やましう思さるべかめり。上の御心ざしは、もとより思ししみにければ、なほこまやかに思しめしたるさまを、人知れず見たてまつり知りたまひてぞ、頼もしくさりとともと思されける。

さるべき節会どもにも、この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむと思し、私さまのかかるはかなき御遊びもめづらしき筋にせさせたまひて、いみじき盛りの御世なり。(注17)  
(注18)

大臣ぞ、なほ常なきものに世を思して、いますこしおとなびおはしますと見たてまつりて、なほ世を背きなんと深く思ほすべかめる。昔の例を見聞くにも、齢足らで官位高くのぼり世に抜けぬる人の、長くえ保たぬわざなりけり。この御世には、身のほどおぼえ過ぎにたり。中ごろなきになりて沈みたりし愁へにかはりて、今までもながらふるなり。今より後の栄えはなほ命うしろめたし。静かに籠りて、後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べん、と思ほして、山里ののどかなるを占めて、御堂を造らせたまひ、仏経のいとなみ添へてせさせたまふめるに、末の君たち、思ふさまにかしづき出だして見むと思しめすにぞ、とく棄てたまはむことは難げなる。いかに思しおきつるにかといと知りがたし。(注19)  
(注20)



(注)

- 1 御土器などまるるついでに——絵合の後、宴うたげの席でお酒を召し上がるついでに。
- 2 学問——漢籍を学ぶこと。
- 3 才学——学識。
- 4 本才のかたがたのもの——学問以外の、音楽などの芸事。
- 5 おぼえぬ山がつになりて——思いもかけず須磨・明石あかしで生活することになって。
- 6 親王——光源氏の弟宮。帥宮。
- 7 おれ者——おろか者。
- 8 家の子——名門の子弟。
- 9 文才——故桐壺院の言葉であり、この「文才」は漢詩文を作る才能のこと。
- 10 墨書きの上手ども跡をくらうなしつつかめるは——宮中の絵所の優れた絵師たちも逃げ出してしまいそうなほど。それほどに光源氏の絵が素晴らしいということ。
- 11 書司——後宮の書籍や楽器などをつかさどる後宮の役所。
- 12 大臣——光源氏。
- 13 少将命婦——宮中の女房。
- 14 上人——殿上人。
- 15 拍子たまはず——拍子をとるようにお命じになる。
- 16 上——冷泉帝れいぜい。
- 17 節会——宮廷の行事。
- 18 いみじき盛りの御世——文化的な行事の盛んな時代。
- 19 今より後——栄華の頂点に立った後。
- 20 山里ののどかなるを占めて、御堂を造らせたまひ——山里の閑静な地に、仏道修行を行う御堂をお造らせになり。

問一 傍線部 a、e について、文法的意味が同じものを記号で答えなさい。

問二 傍線部 A「御覧じ」、B「思ふ」、C「知ら」、D「思しめし」について、それぞれの主語を次のア～カの選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号を何度選んでもよい。

ア 中宮

イ 権中納言

ウ 大臣（光源氏）

エ 院（故桐壺院）

オ 上（冷泉帝）

カ 親王（帥宮）

問三 傍線部①「いはけなき」、③「はかなき」、⑤「ゆかしがらせたまへど」、⑥「なほ世を背きなん」をそれぞれ現代語訳しなさい。

問四 傍線部②「この道な深く習ひそ」と院が光源氏に戒めたのはなぜか、その理由を七十字程度で説明しなさい。

問五 傍線部④「みなうちしほたれたまひぬ」とあるが、その理由を説明しなさい。

問六 傍線部⑦「とく棄てたまはむことは難げなる」とあるが、このように述べられている理由を説明しなさい。

三 次（三）の詩は、唐の劉長卿が作った「余干旅舎」という五言律詩である。これを読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合で、返り点、送り仮名を省いたところがある）。（配点50）

余干旅舎  
（注1）ノ （注2）ニテ

揺落暮天廻  
（注3）ハルカニ

青楓霜葉稀  
せいふう 霜葉 稀  
まれナリ

孤城向水閉  
（注4）① （注5）ジ

独鳥背人飛  
（注6）そむキテ  
ニ

渡口月初上  
（注7） （注8）メテ  
のぼリ

隣家漁未帰  
すなどりシテ②

郷心正欲絶  
（注9）きはマラント

何処いづレノところカ 擣(注10)ウツ 寒 衣ヲ

〔劉長卿詩編年箋注〕より〕

(注)

- 1 余干——地名。現在の江西省にある。
- 2 旅舎——旅館。宿屋。
- 3 揺落——木々が落葉する。
- 4 城——城壁をめぐらした都市。
- 5 水——川。
- 6 背——背を向ける。
- 7 渡口——渡し場。
- 8 初——やとくしたばかり。
- 9 絶——最高潮に達する。
- 10 擣——きぬたを打つ。

問一 この詩に描かれている季節はいつ頃か、答えなさい。

問二 この詩に描かれている場面は、一日のうちのいつ頃の時間か、次の選択肢の中から最もふさわしいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 明け方から日中にかけて
- イ 日中から日暮れにかけて
- ウ 日暮れから夜にかけて
- エ 深夜から明け方にかけて

問三 押韻している四つの字を、全て挙げなさい。

問四 第三句「孤城向水閉」から第六句「隣家漁未帰」までは、作者のどのような情感を表しているか、次の選択肢の中から、ふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

- |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| ア 期待感 | イ 焦燥感 | ウ 高揚感 | エ 疎外感 | オ 疲労感 |
| カ 安心感 | キ 孤独感 | ク 陶醉感 |       |       |

問五 傍線部①「向水」と傍線部②「未帰」をそれぞれ訓読し、全体をひらがなで書きなさい。解答は現代仮名遣いで書きなさい。

問六 第五句「渡口月初上」から第六句「隣家漁未帰」までを現代日本語に訳しなさい。

問七 これまでの設問を踏まえつつ、この詩を通して表された作者の心情を、五十字程度で書きなさい。